弓、杖を持つ立像なりとす。（以上仏教大辞林）　右二行目の九三宮忌神以下一字下げ書くべきを誤れり。

○須江神社　中夜野村字末鎮座

祭神　猿田彦神、猿田毘古神とも書く。皇孫を杵尊降臨の時此神天八衢（アヤチマタ）に立つて居られたり身長偉大、眼光烱々鏡の如し。供御の神に皆恐れて其名を問ふことさへせず仕方なかつたそこで天宇受賣命に問はしめたまうたら宇受賣命其前に到り立ちて大いに笑ひたまふ。猿田彦、汝は何故に笑ふかといふと、宇受賣命及向して今皇孫が降臨ますの途上に廻り立つい誰ぞと曰く吾は皇孫を導きまつらんがために奉迎せりとやがて先導しまつり遂に宇受賣命に送られて伊勢に至つて止まりたまうたる。

○道祖神、古来道路に鎮座せられ妖魅（ヤチマタ）の侵入を防ぎ悪神を壊却する神とせらる。岐（フナド）ノ神、塞神といふ亦同じ八衢比古、久那（クナド）斗神、八衢比賣を祭りて疫癘等の悪神を駆逐せしむるものとし朝廷に於ては道饗（ミチアヘマツリ）祭とて厚く之を処置せられ民間にても至る所之を祭ることゝなれり。然るに中古以来猿田彦の天孫降臨の際先導したまひたるに混じ多くは此神を祭ることゝなりぬるさればこの神道名月類聚抄に道祖神猿田彦大神とし而して是れ道祖神にして導きの故なりとあり。かくて邁進翁の説く所に依れば猿といふ言葉より思ひ付きし道家の庚申祭を奉強して衢に庚申塔などを造立し仏者之れに乗じて天台宗の一心三観として不見、不聞、不言といふことあるを附會して石塔に月を塞ぎ、口を塞ぐる三猿を彫付けて建てたるに真言宗も亦これに倣ひて青面金剛なりと奉強して益々其塔を立つることとなれり。（以上哲学大辞書）

○庚申待（カウシンマチ）　庚申の夜に行ふ。帝釈天及青面金剛の祭をいふ。マチといふは籠りの意なり。此時を忌むことを絶夜打集りて歌よみ物語し、遊戯たけとして終ふる。神棚に赤飯を供へ草花などを立つ。菅原道真公の庚申の詩あり。朱雀天皇天慶二年内

裏始めて庚申御遊びあれば夏以前より早く世に行はれしたるもの（し 天慶以前より内裏に行はれ）
道真公左遷の時宇多上皇のたゞ菅根が宮内を拒絶たる所にて知らるこのこと前に等 後猿田彦神を之に附会したる逐に三猿を
祭るなどの風も起れり。庚申の夜猿田彦大神を祭ることは原順が庚申夜参和歌
小序にかけまくもかしこき御神あはれともめぐみさいはい給てしっ又和漢朗詠集に
彼が庚申の歌に「沖中のえさるかたなき釣舟にあまやさきたつ魚やさきたつ」と
あるは神代記をてきしものうなと見えたれば こ化また早くよりの事なるを知るべし江戸時代
には各戸酒宴を催すもあり、或炒豆を食し女子縫針の業を止め 鉄漿 オハグロ をつ
けさるの風なりき。 以上歴史 大辞典 これは餘談なれども序に記しおく。

中位乙野村字大申子鎮座

○鳥野神社

祭神 福知山市字堀荒木神社祭神に同躰

三岳村字中佐々木鎮座

○小和田神社

祭神 上津綿津見神 中津綿津見神 底津綿津見神の三柱にまします。

この神々は伊邪那岐神が日向小門橘原で御身をお清めなされた時にお生れ
なされた神と申すが御事蹟は傳つて居ない。

三岳村字下佐々木鎮座

○瀧宮神社

祭神 瀬織津姫命、此命も伊邪那岐神の御禊の時にお生れなさ
れた神と申す

三岳村字一宮鎮座

○一宮神社

祭神 仁徳天皇 細見村字芦倶鎮座王手神社に出づ

三岳村字常願寺鎮座

○木林尾神社

祭神 句々廻馳命 又久々能智神とも書くこの神は木を司掌される。
諸国に二ヶ所ずつ御子ずつあるが御事蹟不詳

上川口村字下小田鎮座

○氣比神社

祭神 仲哀天皇 上六人部村字宮寄鎮座八幡神社に出づ

○加茂神社

中夜久野村字八合君鎮座
下夜久野村字井田鎮座

○合　社

祭神　別雷神（カモワケイカツチノ）　正しくは賀茂別雷神（カモワケイカツチノ）と申すべき筈。建角身命の御女たる玉依姫（ヨリヒメ）が賀茂川（カモガワ）（別名瀬見川）の上流（カミ）に遊び給ひ、丹塗矢（ニヌリヤ）に感じ給ひ、御懐妊遊ばされて、産屋を設けられ、その中に御産遊ばされたる御子神なり。

建角身命の御孫たる別雷神（ワケイカツチノカミ）の御母玉依姫（タマヨリヒメ）は賀茂川（カモガワ）の上流（カミ）に遊び給ひ、丹塗矢（ニヌリヤ）に感じ給ひ、御懐妊遊ばされて、産屋を設けられ、その中に御産遊ばされたる御子神なり。

（賀茂川の上流に当たる所、今の京都北郊）ある日、石川の瀬見小川のほとりに遊び給ひ、丹塗矢（ニヌリヤ）が川上から流れて来たるを拾ひ上げ、お床の上においておかれたるに、間もなく玉依姫様御懐妊遊ばされて男子を生み給ひ、やうやうに成長遊ばされたるから外祖父建角身命が御殿を造り戸を閉ぢ酒を醸して諸神を集めて盛宴を催されたる。その時その孫たる別雷神に父はと問うて盃をおさしなされた。乃ち盃をあげて天に向かって屋を突き抜けて天上まで昇ったる。之を賀茂別雷神と申す。

神社考詳節に曰く、欽明天皇の時初祭此六神。下賀茂者玉依姫也。賀茂建角身命之女也。其子為雷神号別雷神。故号下賀茂為祖。号別雷一為上賀茂。

○荻野神社

下夜久野村字千原鎮座

祭神　高御産霊神（タカミムスビノカミ）又高皇産巣日神とも書く。天地初発の時高天原に大事ある毎に必ずその主長となる諸神を率ゐその事に奉りなされたる天照大御神の天岩屋におかくれ遊ばされた時、又皇孫降臨の前先発の御使を発遣したまふて中国平定の策を定めたまふた如き常に遠謀（カンリヨ）遠慮にましましまして天照大御神を御扶助遊ばされた八百万神を御指揮遊ばされたのである。此大神　高木神（タカギノカミ）又は高天彦命（タカマヒコノミコト）と申し（命は神）神皇産霊神、天之御中主神と合せ奉りて造化三神と申す。　但し高田社祭神は或曰天児屋根命、太玉命、或曰荻野朝忠と後説或は然り。

朝忠は彦六と称す丹波の人なり。後醍醐帝の船上山にましますや朝忠族人と衆を聚め勤王に奉仕し、愚忠顕に従って六波羅を攻め利あらず。朝忠安達祐秀等と敗亡三千余人を拾集して丹波に還り高山寺城（氷上郡柿茂荘）に拠る。また幾

ばくたるべずして足利尊氏義を篠村（南桑田郡）に挙げ、朝忠之に偏することを欲せず別に児島高徳と若狭より進んで京師に入る。尊氏及びすでに朝忠の久下、長澤、波々伯部の族と仁木頼章を擁して将となし以て之に應ず。尊氏事を挙て尊氏を怨望す。興国六年児島高徳、新田義治を奉じて兵を起し密に使を遣はして朝忠を説かむ。朝忠之に従ひ高坐城に拠り日を刻して同じく事を挙げんことを謀る。尊氏之を聞き山名時氏をして之を攻めしむ。時氏長囲をなして糧道を断つ。朝忠保つこと能はず遂に出て降る。丹波守護となり尾張守に任せらる。正平二年高師直後ひて四條畷に戰ひ七年春国人兵を挙げて朝忠敗走して後終る所を知らず。大姐嗚呼夫服常なき彼朝忠終に国人に延ばる。其事跡寧ろ當然なりか。

下夜久野村字千原鎮座

○熱田神社

祭神　ヤマトタケノ尊

日本武尊の景行天皇の御子で御母は針間之伊那毘能大郎女（ハリマノイナビノオホイラツメ）事

すつ尊の幼名は小碓（オウス）命又は御名は倭男具那（ヤマトヲグナ）命と申す。性男武にまします。曾て父天皇がこの命を仰せて御兄皇子の朝夕の食事に来たまはぬを諭させたまふ。後数日を経れども御兄いたほ来たまはぬ。天皇又この命にお問ひなされた。すると命は吾が兄が暁に厠に入った時、捕へひしぎて其手足を捧きぬとお答へなされた。天皇は命の勇猛に感じたまうたったまく筑紫の熊襲建を伐たせられた。命はやがて筑紫に下りたまひ、十度熊襲の新宅に宴会を開けるを知って自ら童女の装をなし室内にお入りなされた。建は命の容姿に色を変じ酔ひて熟睡したった。命は時分はよしといい剣を取って建を刺し殺された。弟建之を見て恐れて逃げうとする。命は追うて階下に至り後から之を刺しなされた。建曰くあゝ君は誠ぞと。命曰く吾は天皇の皇子名は倭男具那と、建曰く吾は一国の猛者なり、君の如きを見ず今より後倭建（ヤマトタケルノミコト）御子と称し奉らんと、之より後倭建命と申す。かくて京に凱旋して復命なされた。天皇復た出雲を伐たせたまうたやがて出雲

国に入りたまひ偽って又、建と共にお遊びなされたの一日赤樫の偽刀をおびて建と共に肥河で游泳なされ、命忽ち河から岸に上って建の刀を奪ふ時、偽って仰せられるに、吾、汝と刀を易へんと、建、河より上れば命刀を拾いて、汝、吾と決闘なんと仰せられると、建あわてて刀を拾おうとするけれども拾はけない。そこを命、かって殺してしまった。かくて命はお還りなされ其に刀をうすを天皇に申しあげられたらこのたびも大いに褒められなされた。

今度はまた東夷を平定する重任を命に仰せつけられた。命は伊勢神宮を拝し たるほお姨 倭比売命(ヤマトヒメノ)にお暇乞もなされ倭姫命はいろいろ御教訓をお授けたてまつられた。命はいよいよこれをお立ちなされ東国に向はせられた駿河国迫おいでなさるとそこの国造が佯って降参し且つ曰く此あたりの野中に狂暴な賊がおります之をおうちなさるやうと申し出た。命は早速野中に入りそこの賊をうたうとせられると国造火を放ち命を焼き殺し奉らうとした。命は草薙剣で(前モコモ、クサナギニフラス、ムラクニより書換ヲ)草を薙ぎたまうたから火は逆に燃えて命を囲んだ賊どもが皆焼死した。命はなほもお進みなされ待無ル日しも海路をおとりなされたが風浪高く大いに困難なされた。此時お妃の稚媛と申すが海に投じて海神にお祈りなされたことさ、あって海やうに東北地方をも平定なされて御飯建に尾張の宮簀姫の許にお立ち寄りをなされ伊吹山の妖神をうち平げんとして伊吹山なされたが途中で毒霧のために心地あしくなられ行やがて下山して伊勢国能褒野で遂に薨じたまうた。天皇大いに悼惜したまうた。其世に厚く葬儀を行はせられたが、安時霊柩から白鳥が出て大和国を指して飛び去った。お柩を検すると御衣のみて玉体はなし。是は旌 是鳥の停れる大和風琴引原及び河内国古市郡に陵をおこしらえなされた。時人この三陵を白鳥陵と申した。命はかくも御一生を兵馬の間にお過しなされ、しかもその間窮屈で出すの賊どもを御平定なされ、まことに御武功の高い方にまますその御御子即ち仲哀天皇にまする。命の御事蹟はなほあらうがこうには大略申しておくこと

○日吉神社

上夜久野村字中垣鎮座

○九六

祭神　大山咋神（オホヤマクヒノ）　西筋村字土鎮座松尾神社の部に出づ

（神社史料に云ふ近江国日吉神社の分霊なりと、）

大年神又聖天知迦流美豆比賣、生ニナミ、次大山咋神、亦名山末之大主神、

此神者坐近淡海国之日枝山、亦坐葛野之松尾、　上川口村字上大内鎮座

○蛭子神社

祭神　事代主神　細見村字細見辻鎮座梅田神社の部に出づ

三岳村字喜多鎮座

○六所神社

祭神、上筒男命（ウハツツヲノ）　磐土命（ナカツツヲノ）　中筒男命（ナカツツヲノ）

大直日命（オホナホビノ）、大禍津日命（オホマガツヒノ）、　大地海原諸命（オホヤラミノ）　赤土命（ハニヤマノ）　底筒男命（ソコツツヲノ）　底土命（ソコヤマノ）

（コハ一柱ノ名ニアラズ、伊邪那岐神ノ御禊ノ時ナリマセル諸神）

此五柱及其他も皆伊邪那岐神が日向小門橘原で身を清め禊ぎトイフたまうた時に御生まれなさった神々である。古事記に上巻初め中瀬に於て水を浴して御身を洗いたまふ時に八十禍津日神、次に大禍津日神がお生まれなされた

此二柱、伊邪那岐命の禊のまします黄泉国の穢によって成りまさる神である。次に其禍を直すために神直日神、次に大直日神、次に伊能売神がお生まれなされたそれから水底において身を清めたまふ時に底筒尾、次に中筒尾、次に上筒尾の三柱がお生まれなされた。さて底筒尾以下三柱は海上を司る神なので住吉明神と申すこの神々である。但最後の大地海原諸々は海陸の諸神といふので一柱の神名にあらざる申すまでもない。何かの間違であらうとおもふ。

日本紀一書に伊弉諾尊遂将嬰滌身之所沾乃興言曰々、又沈濯於海底因以生神号曰底津少童命、次底筒男命、又潛濯於潮中因以生神号曰中筒少童命、次中筒男命、又浄濯於潮上因以生神号曰表津少童命、次表筒男命、凡有九神矣、其底筒男命、中筒男命、表筒男命、是即住吉大神矣。　住吉記考に曰く住吉のすべて四社なり。第一殿住吉大明神、第二殿は八幡天菩薩、第三殿は天照大神宮

第四殿は神功皇后なり。又或説には第一は諏訪大明神、第二は八幡大菩薩、第三住吉大明神、第四神功皇后ともいへり。

○住吉神社　　金山村字長尾鎮座

祭神　上筒男、中筒男、底筒男の三柱と申す。前の記載参照

○有徳神社　　金谷村字田和鎮座

祭神　鎌倉権五郎景政、姓は平氏、祖父忠通、相模鎌倉を領して居たので長尾氏と云ふ。寛治五年源義家に従うて清原武衡を征した。其時十六歳であった。敵鳥海弥三郎のために其右眼を射られた。景政大いに怒り矢を抜かずして直に弥三郎を索めて戦ひ遂に之を殺した。さて其矢を抜かんとて三浦為嗣の扶けたのなれども抜けない。為嗣の足で景政の面を踏んだ。両手力をこめて遂に抜いた。景政は其無禮を怒って謝罪させた。人皆其勇猛に感じた。

○無格社　御霊神社　　福知山町字廣小路

祭神　守氣母智神　　傳へいふ東山天皇宝永元年朽木氏初代の城主伊豫守植昌侯の時、常照寺に光秀の霊を勧請して御霊さんと称した。その後、櫻町天皇元文二年（紀元二三九七）即ち朽木氏四代土佐守植治侯の代に、町民から右御霊会の挙行を願主へ出願して許可されたるさうして子供角力とか作り物などの餘興も催したっその後年を逐うて盛になり、終に福知山の一名物若しくは唯一の名高い祭となったされども今の廣小路出来ない常照寺境内又は附近の町内で餘興を催したに過ぎないで今日のやうな大規模な祭でなかったらしいとおもふ。廣小路の起りは決して今日のやうな目的で出来たのでなく実はその初め町家の火災の用意にとて町の中央なる所謂今の廣小路の用水池を東西一丁、南北十五間を鑿ったこれは延宝五年（二三七）四月五日城家全焼後の計畫である。所がその池は泥が埋まり用に堪へなやうになったから毎戸に課して之を埋めたといふ。かくして今の廣小路が出来たのであるが其年代は又御霊さんを此所に移された年代も

今ら以が祭礼の大仕掛になったのハ移轉後とおもふ往昔未だ荒井江といふた頃からこの廣小路に前の御靈社の附近稲荷の小祠があった、さうして榎の大木があった。これハ今も松の家の前に名木として保護してゐる

そこへ別に殿宇か堂宇かを造って移したものとおもふ、それで今のやうな立派な神殿でハなく瓦葺の堂宇であったと記憶してをる。光秀領治の時代に大いに德政を布いたから其恩恵の意味でやう〳〵盛大な祭礼を挙げるやうになったものとおもふ。ともかく御靈さんと福知山とは深い関係があるやうであるし、又名高い祭りでもあるから無格社ながらこゝに附加しておく。

○無格社朝暉神社　福知山町旧城址鎮座

祭神　朽木植綱侯　朽木氏當城六代の主出羽守の時其祖源植綱侯の霊を祀り傳家の宝刀を模して御神躰となさった。再建以上八城内に祭られたのであるが其後十代綱條侯の代に至り文政七年（二四八四）十月十日城南なる岡（今の中学校居ノ所ナリ）に更に神殿を建て遷し朝暉神社と號す。明治六年十三月為綱侯が堀村（小字下ノ地）に移られた時に當社も其邸内に遷坐せられ同十七年朽木東京移住後もなほ依然下ノ地に鎮座したまうたが同

十二年九月福知山町旧城地天主閣址に奉遷せんことを願ひ且つ其維持方をも立てられたから同十四年四月十三日遷座式を行はれた。同年十月場村なる九畝九三歩の旧宅地と田地二畝六歩を同社に寄附されたから本年春秋の例祭に必ず能楽を奉されるから永年務社格から名社として附記しておく。

丹波国
天田郡郷村社祭神記　本記　畢

本郡神職名

〇郷社一宮神社社司　府立福知山中等校教諭	世襲	荒木良雄
〇郷社式内天照玉命神社社司	二代	山本政照
〇村社大原神社社掌	世襲	西山定光
〇村社式内生野神社社掌　天田郡細見小等校訓導	二代	中川繁男
〇村社式内奄我神社社掌		田中政蔵
〇仝		松本孫吉
〇村社一宮神社社掌（牧）大正九年九月殺	二代	大谷是種
〇村社一宮神社社掌（額田）	世襲	役野信吉
〇村社三岳神社社掌	二代	本郷鷲雄
〇御霊神社社掌		用瀬馬二郎

謄寫を終て

本記の起稿は今から約一年前です。さうして本年六月下旬ふやつと脱稿いたしました。校正のすむと急いで某地の印刷会社へ原稿送つて見積らせますと、驚くべし一部ざつと五円近くかゝるといふ。尤も紙数もこれよりかゝり校多くて和綴としてです。幾ら紙價や労銀が騰貴したといへ、これでは余りのことゝおもつて又他を聞合せましたあげくいづれも前のと大した差違がありませぬ。よし少々安價でも名刺や葉書位の印刷屋ではとても手に合はない。折角から出来上つたものを私ふしまつておいた所が何の無ふもたらぬ。如何せうかと焦慮のあまり、いつそ自分が小学校へ出かけて せめて四五年以上の児童にでも話すことにせう。それかふ中学校の昼中休憩が早いからその間ふ郡内各小学校を廻せう。さうすれば七月末までに八九日はあるから大部分は廻れるだらうと考へてそれ〳〵日程まで腹案したものゝ元来ものいふことの嫌ひな

自分ハ一向出ないた限りで厭なようてすゝまない。ちゃうーかゝしてゐてハいつまで経つても埒心の届く折がない。どうせうかやはり出かけることにせうかと、とやかくとおもひわづらふ間ふ小号後の体裁ハいよ〳〵近づいた。あゝどうして幾表せうかと其幸惨憺の結果のこの謄写とたゞた次第です。これもそんなことゞ出来るものかなどゝ云ひ乱れもしたが人八年睡の夢まどろかな昼ふも汗を拭ひ〳〵写しをり、夜ハいぶせき蚊遣火の中でひたすらこつ〳〵と鉄筆をはしらせて原稿三百三十頁がやっと出来上ったのです。今日のやうな迫んだ世の中で丁度むゝの版下書のまねをしてゐかもその体裁のまづいことゝなつてもゐまるたのハまことふ数世紀前のやり方で、人ハ定駭冉折と笑ひもせうが吾等ゐ際の者ハこのぐらゐなことをよういたしまるがないです。貧生の能業と嘲られてもかまひませぬ。それゆゑ川路先生や芝栄君の序文ハせめてこれだけハ石版ゐとおもつたのですが、これも他日を待つことゝして折角の金玉を大ふ傷けたわけです。これもこゝにおことわりしておきます。

大正九年八月十八日後二時頃

竹毛花生

大正九年八月十八日謄写終

非黄和

京都市天田郡福知山町字筵尾

山口加来之助

編述

終